

序

厚生労働省の2009年死因統計によれば、不慮の事故による死亡は、全年齢層では死因原因の第6位であるが、将来の日本を担うべき1歳～19歳では第1～2位である。また、2010年におけるわが国の交通事故発生件数は724,811件、負傷者数は894,281人であり、24時間死者数は4,863人で前年に比べて51人減少した。しかしながら、毎年5,000人近くの尊い命が交通死亡事故で失われていることは憂慮すべきである。2011年3月に国が定めた第9次交通安全基本計画では、2015年までに24時間交通事故死者数を3,000人以下とする数値目標を定めたことから、外傷診療関係者には、さらなる取り組み強化が求められている。

一方、厚生労働科学研究で、生命徵候を有して救命救急センターに搬送され、その後死亡した症例の約4割が、防ぎ得た外傷死亡（preventable trauma death：PTD）の疑いであったのを受け、2000年以降、わが国にも外傷診療体制（外傷システム）の整備が進められている。具体的には、救急隊員のためのJapan Prehospital Trauma Evaluation and Care (JPTECTM) プログラムの開発、ドクターへリ事業の推進、医師に対するJapan Advanced Trauma Evaluation and Care (JATECTM) プログラムの開発、病院内における外傷診療機能の向上を目的とした外傷登録制度の発足が挙げられる。

これら外傷診療体制の整備に伴い、交通事故や労災事故等により生命の危機に瀕した重症外傷患者が、救命の可能性を残しつつ緊急手術などの根本治療（definitive care）に引き継がれることになった。そのことはすなわち、初療や根本治療の適否によって負傷者の生死が決定されることを意味し、根本治療を担う外科医、特にAcute Care Surgeonがきわめて大きな役割を担うことになった。

このような時代の流れを受け、2009年2月に「外傷外科医のための全国規模の研究会」として、Acute Care Surgery研究会が発足し、現在は日本Acute Care Surgery学会として活動するに至っている。本書は本学会のコアメンバーが、外傷外科手術に関する内外の知見を集積し、自らの豊富な臨床経験をもとに、精魂込めて執筆した書である。イラストを多用し、DVDによる動画も大変充実しているので、ビジュアル面からの理解がしやすくなっている。

Acute Care Surgeonに求められる知識と技能は、外科手術手技はもとより、心停止が切迫した重症患者に対する、救命を最優先にした外科治療戦略である。外傷診療に携わる全国の外科医や救急医の方々が、本書を明日からの外傷診療に活用し、一人でも多くの外傷患者の命が救われることを切に願っている。

2012年10月

日本医科大学千葉北総病院救命救急センター

益子邦洋